

●分水嶺

◇自然がはぐくむ センス オブ ワンダー

上遠恵子…… 3

●連載／教育のひろば

◇トイレづくりから学ぶもの

小林純子 浅井佐知子…… 4

●特集／道徳の授業——「子どもの心の高まり」を期待して Ⅲ——

◇「高まり」は「広がり」から

上杉賢士…… 6

◇何が子どもの心を高めたか

*①家庭や地域との連携で子どもが変わる

江藤幸恵…… 8

*②心の高まり・広がりを実感できる道徳学習

本多妃佐子…… 10

*③人とかかわりの中で育つ子ども

高野力郎…… 12

*④道徳授業は、真っ向からの直球勝負に限る！

松下浩一…… 14

*⑤キャリア教育の視点にたつ心に響く道徳授業をめざして

渡部多磨美…… 16

*⑥子どもの見方・考え方を深める「道徳の授業」をめざして

小野勇一…… 18

●連載／わたしの提言

◇自分を変えていく「道徳の力」を子どもたちに

渡邊達生…… 20

●連載／研究会紹介

◇豊かな心と未来を拓く力を育てる道徳教育

工藤浩一…… 22

●連載／道徳の授業—Q & A—

◇家庭や地域との連携について

山内良夫…… 24

●連載／明日の教育を考える

◇教育再生と奉仕活動

山本恒夫…… 26



上遠恵子先生 ▶レイチェル・カーソンの志を語りつぐことをライフワークにしています。子どもと遊ぶのが大好きです。子どもたちに「豊かな感性」を培うには、まず大人が変わらねばならないと思います。



小林純子先生 ▶設計事務所 Gondra 所長。チャームステーション（大型公衆トイレ、1989年竣工）の設計をきっかけに、駅、商業施設、公園、学校などの設計が活動の中心になる。トイレから学校を考える中で、学校全体の基本計画にも携わる。



浅井佐知子先生 ▶以前から、「コーポラティブハウス」や「まちづくりワークショップ」など、関係者の参加とともに設計する取り組みに多く関わる。子どもたちに「トイレの先生」と声を掛けられ喜んでいる。



上杉賢士先生 ▶昨年9月にアメリカ視察に行った。5日間で延べ800マイルにわたる車の移動で、9校・1機関・1学会を訪問した。私たちの視察を支えてくれた現地関係者の「人情」を感じたツアーでもあった。



江藤幸恵先生 ▶外国の方を鎌倉へ案内する機会がありました。自分のペースでゆっくり行動する、まわりへの気ない心配りを……いつも忙しく、大切なものを見落としている自分を反省しました。一番たくさんの方を見つけたのは私でした。



本多妃佐子先生 ▶平成17年度から、学校・家庭・地域社会が一体となった心の教育に取り組んでいます。保護者の意識を変えるには、子どもの姿が変わっていく様子を見せるのが近道だと実感しています。



高野力郎先生 ▶第4学年の担任をしています。毎朝、子どもたちと続けた合唱は、お互いの心が響き合う心地よさと、ほどよい緊張感を学級にもたらしているように感じます。ほんとうに歌は、いいですね。



松下浩一先生 ▶“21世紀は、心の開拓の時代”ととらえて、日々子どもたちの心に届く授業を心がけています。拙著『感じる心が学ぶ力を育む』（梧桐書院）をお読み頂くと、私の授業スタイルがわかり取けると存じます。



渡部多磨美先生 ▶自然教室で沢登りをしました。足を滑らせ全身ずぶ濡れになると、子どもたちは大喜び。豊かな自然の中で、久しぶりに童心へ帰って楽しみました。子どもの視線で見て、感じるものが道徳教育の原点だと再認識しました。



小野勇一先生 ▶附属小に赴任し4年目。この間多くの先生方と出会い、その度にパワーを頂いてきた。先日石川県の全小道の大会に参加し『力のある資料』に感銘を受けた。石川の先生方から頂いたパワーを自分の実践にもつなげていきたい。



渡邊達生先生 ▶吉川英治の『新・平家物語』を読んでいます。清盛が葛藤の中で作りあげた世界に感じさせられます。ところで原稿を書き上げた途端P.Cが壊れ復旧まで丸1日かかりました。突然の暗転は平家の行く末と似るところがあります。



工藤浩一先生 ▶津軽地区国語科教育研究会会長も兼任。教科・道徳のサークル活動を通し、人間性を育む教育を推進中。子どもの問題行動は道徳性の未熟さが根底にあり、現場の教師による心の教育・道徳教育を重視した活動の展開が緊急課題です。



山内良夫先生 ▶本校で神奈川県小学校教育研究会の社会科の研究発表会が行われます。“人や地域に学ぶ”のテーマで地域学習に取り組んでいます。地域の様子から道徳資料となるエピソードを発見し、なかなか有意義な研究実践の毎日です。



山本恒夫先生 ▶筑波大学名誉教授、教育学博士、日本生涯教育学会常任顧問（元会長）、中央教育審議会委員、臨時委員などを歴任。『21世紀生涯学習への招待』（協同出版）、『生涯教育「答申」ハンドブック』（共著編／文恵堂）など著書多数。

自然がはぐくむ センス オブ ワンダー

エッセイスト／レイチェル・カーソン日本協会理事長 上遠 恵子

私は、40年来アメリカの海洋生物学者で作家のレイチェル・カーソンの研究をしてきました。カーソンは、環境問題を語るとき必ずといってよいほど引き合いに出される『沈黙の春』の著者として知られています。私は1991年に彼女の最後の作品『センス オブ ワンダー』を訳出する機会に恵まれましたが、訳しながら何度も“そうだ！ そうだ！”と共感の声をあげたものです。

“わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます”（『センス オブ ワンダー』新潮社）。そして、この言葉を実証するようなことがありました。

晩秋のある日、庭で遊んでいた小さな男の子の頭にコツンと何かが当たりました。見るとそれはヤマフジのタネでした。ヤマフジの莢は熟して乾燥すると捻れて裂け、タネは弾かれて飛び出すので頭にコツンと当たったのです。男の子はたちまちタネのとりこになりました。子どもの低い視線は地面に落ちているタネを見つけるのにはまことに便利です。保育園のお散歩、行き帰りの道で目につくタ

ネを拾ってきます。一寸法師が乗っているようなアオギリのタネを見つけたときの興奮はまわりの大人も巻き込まれたほどでした。母親が「たねの旅立ち」という写真集をみせてくれました。字の読めない彼は自分の知っているタネの説明を知りたくてたまりません。仕事のある親たちはタイミングよく教えてやれません。彼はお隣の小学2年生のお兄ちゃんに字を教えて貰うことを考えつきました。小さな師弟関係はしばらく続き、ついに彼は字を覚え、知りたかったタネの名前はガガイモであるとわかり大満足でした。

子どもたちにとって自然界は不思議に満ちています。すぐにわかるものもあればなかなかわからないものもあります。その謎を解こうとするとき、子どもの創造力と想像力はフル活動します。また植物を育てたり、小動物や鳥、虫を飼ったりすることによって“待つ”ことを知ります。最近はずべてが忙しく早く結果がでるのが良いとする流れがあります。親が発する言葉で最も多いのが“早くしなさい！”。しかし、花が開くまで、蛹が羽化するまで、時を待たなければなりません。そこには人間の力では動かすことのできない自然のリズムがあります。それはバーチャルではないほんものに触れたときのみ得られる体験です。そしてなによりも生命そのものを見つめることができます。可愛がっていたペットが死んでしまった、つかまえてきたバッタをいじりすぎて殺してしまった、というような体験——ときには涙を伴いながら——を通して生命はけっしてリセットできないもの、かけがえのないものであることを理解するのです。

2007年にはレイチェル・カーソン生誕100年を迎えます。自然との共生を説いたそのメッセージは、いまでも生き続けています。



トイレづくりから学ぶもの

設計事務所ゴンドラ 小林 純子 ^{あざい} 浅井佐知子

学校のトイレが好きか、と聞かれて、「好き」と答える子どもはほとんどいない。そのいちばん嫌な汚いところを子どもたちといっしょに考え、きれいにしていく取り組みが、子どもたちや関わった人たちのトイレ観を変えていく。トイレは小さな場所だが、大きな力をもっていると感じている。

私たちは数多くのトイレの設計を手がけてきた。そのたびにうれしく思うのは、トイレがきれいになると、使い終わって利用者がにこにこして出てくることである。排泄が落ち着いて堂々とできることは、快適で心休まることなのだろう。一方で、新しくできたときはよいが、きれいに使ってもらいメンテナンスが行き届かないと、快適さは持続できない。

学校のトイレでは、トイレを使えない子どもたちが多い。校舎の老朽化や他の施設のトイレ環境との落差で、使いたくないトイレと受け止められている。また、トイレでいじめられたり、元々排泄は恥ずかしいことという意識が強く、家までがまんするという行動にもなっている。そんな状況が学校のトイレ改修の背景にある。

私たちが最近設計に関わった、富山県滑川市立西部小学校の例を紹介したい。滑川市の郊外にある児童数536名の学校で、住宅が増加し校舎が手狭になったので、既存校舎を活かしながら、増築と大規模改修により校舎をつくり上げる計画である。まず手始めに、トイレに関する子どもたちの既成概念を変えたいと考えた。そこで、PTA や子どもたち有志へ、肛門科の先生から排泄についての話をしていただいた。「健康の3原則は、快食、快眠、快便。快便とは、きばらずに便意にそって自然に排出できること。それが健康体で

あり、口から肛門まで一本道なので、うんこを見れば身体の状態がわかる。」と、排泄が人にとって大事な点を話してくださった。確かに下腹部に何か残っている感じがあるときは気持ちも身体もすっきりしないのを、多くの人が感じていることと思う。

トイレは健康に生きていくうえで大切な場所であると確認してもらった後、児童・教職員に学校のトイレについてのアンケートを行った。学校のトイレを嫌いな子どもが約1/3はいて、トイレをがまんしているのである。一方、「あなたにとって学校のトイレはどんな場所か」と聞くと、排泄する場所はもちろんだが、おしゃべりをする場所、一人になれる場所、と自分たちの居場所としても捉えている。

次のワークショップでは「トイレなぜなぜ探検隊」と称して、アンケートで挙げられた、臭い、暗い、狭い点について専門家といっしょになぜなのかを掘り下げてみた。ただ、話を聞くだけでなく、みんなといっしょに意見を出し合ったり、感覚的に捉えていたことを、その原因を調べて具体的な数値を知り、体感することで、総合学習的な時間になっていった。たとえば、トイレが暗い原因を調べるグループでは、照度計を持ちトイレの明るさを測定した。19ルクスから15,400ルクスまで、照明が近くないブースの中は暗く、窓のそばはとても明るくと、その差は予想以上であった。臭い原因を調べるグループは、床排水の目皿や小便器の内側を、鏡を使って見えにくい部分まで見て、「尿石」（おしっこの中のカルシウムが固まったもので、においの元となる）が臭さの原因になっていることを突き止めた。狭い原因の探求グループは、スケールを持って現在のトイレの寸法を測定し、快



〈ワークショップの様子〉

におい博士とチェック

便器の位置や高さをみる

適だと感じるための寸法を求めたりした。子どもたちが調査していく様子は、いやなトイレでありながらも生き生きと楽しそうであった。私たちは彼らの調査も参考にしながら設計していった。トイレに限らず新しい学校は子どもたちの心をわくわくさせるもので、うろうろ、きょろきょろ、自分たちの居場所の発見に余念がないようであった。

さらに次のワークショップでは、メンテナンスをテーマとした。新しくできたばかりの心地よいときがチャンスである。この状況が継続することを考えなければならない。今までの古い校舎も竣工時はきれいで、子どもたちは同じ気持ちをもってに違いない。そこで、毎日の清掃や使い方が大切であるということ、掃除の仕方やマナー講習で実践した。清掃のプロに雑巾の絞り方から便器の洗い方まで、トイレ清掃の順番にしたがって話をしてもらった。この小学校は児童がトイレを清掃する。

学校の先生は、「排泄に関する見方や認識が変わり、学校のトイレも決して嫌な場所ではなく、楽しい場所である、というトイレに対する意識が変わった。また、トイレを快適な空間にするための改修に関わったことで、汚したら自分でふく、などのマナーが身についた」という。また教職員も、月末に「トイレの大掃除」の時間を特設しトイレ掃除を行い、きれいな状態を保とうと努めるようになったとのこと。

トイレの快適さは持続されないと意味がない。それには、トイレをきれいに使ってもらうことが必要で、トイレに関心と愛着をもってもらうことが重要である。その方法としてワークショップを行ってきた。

以前、世田谷区で子どもたちに参加させながら、トイレ改修をした学校の校長先生が、トイレづくりは総合学習であった、とおっしゃった。自分の生活空間に興味や関心をもつ機会にもなり、また、自分たちの意見・要望が反映され実現した姿を見たとき、その関わりが成果として実感できる。子どもたちの心を育てるよい機会なのである。

設計事務所 Gondola <http://gondola-archi.com/>



小便器の間隔を測る



まとめ作業



清掃の様子



低学年の男子トイレ



水廻りコーナーと
トイレ（左奥）



「高まり」は「広がり」から

～関係性の中で自律性を獲得する営み～

千葉大学大学院教授 上杉 賢士

◆共に学ぶ関係のよさ

道徳教育の研究らしきことを始めて30年ほどが経過した。決して加齢のせいではないと思うのだが、最近つくづく道徳の研究をやってきてよかったと思っている。

いつの間にか「学力向上」のコンセンサスができたかのように、教育改革が進行している。その折に、突然降って湧いたように例の「必修漏れ」騒動が起きた。半ば公然の事実だったとはいえ、この騒動はこれまでのものとは少々性格が違う。

第一に、重要な問題ではあるとはいっても、被害者がだれなのかかわからない。教師は生徒のためを思い、生徒もその保護者もそれを歓迎している。でも、「ルール違反」だとしてバッシングが始まった。

第二に、仮にルールどおりに戻したとしても、どこからか不満が出る。そして、お互いに監視し合うような奇妙な関係になる。いずれそれは「学習指導要領」への不満となることも十分予想される。

こうした事態が生じるのは、第一に大学のありようのせいなのだろうが、その背後にある個人や学校単位で一流大学への進学をめざそうとする競争原理が元凶なのではないか。

そして、その競争原理は共に学ぶ仲間の間でも生じる。他より抜きん出ることが競争に勝つことを意味する。机を並べている者同士がそうした関係にあるのは、何とも悲しい事態だと言わざるを得ない。

道徳の研究を続けてきてよかったと思うのは、この競争原理とは無縁の世界だからである。「数値的評価はしない」という原則のせ

いだけではない。道徳においては、「みんなでよくなる」ことが可能だからである。

最近、「協同教育」を推進している研究者たちとの交流の機会が増えたが、協同教育においては、グループやクラスといった集団全体がしっかり学ぶことを重視し、成績下位の生徒たちが取り残されるような事態を否定するという。さらに言えば、共に学ぶことによってお互いに高まり合うことを前提にして授業が組織化される。

あえて、こうした主張が注目されるのは、一般の授業では特別な配慮がなされない限り、必然的に「できる子」と「できない子」を弁別してしまう宿命にあるからである。

さて、日常の道徳授業で「みんなでよくなる」ことをどれほどメッセージとして伝えているか。特定の子だけにスポットライトが当たることはないだろうか。それぞれの発言や意見が否定されることなく、受け入れられる心地よさをだれもが感じているだろうか。だれかの発言のおかげで、いいことが学べたというような実感をもてるだろうか。学びの水平的な「広がり」という視点からの再点検が必要である。

◆「高まり」は「自律性」の獲得

これまでに述べたことを「関係性」と括るとすれば、「高まり」はそのことによって獲得され、もたらされる「自律性」ということができる。

一般に、道徳教育における自律性は、「他に依存しない」「衝動を抑える」というように、必ずしもポジティブな意味では理解されていない傾向にある。

しかし、PISA（国際学習到達度調査）の第2回目の調査結果が発表されて以来、北欧の教育風土が熱い注目を浴びている。そこでは、「目標やめあてに向かって、自己決定を重ねながら学ぶ」というような意味において、きわめて重要な概念として扱われている。自分の向かう先を具体的にイメージする。それを尊重しつつ、個人に応じた学びの環境を整備することに最大限の配慮をする。

それを象徴する事例がある。デンマークに3年間滞在して復学した学生（現職教員）から聞いたエピソードである。

先に渡欧していたご主人が、息子さんの入学手続きのために近くの学校を訪問した。学校の説明を一通り聞いた後に「それではお願いします」と言うと、校長先生が怒り出したという。「まだ、私たちはあなたが自分の子どもをどのように育てたいのか聞いていない」という理由によるものだった。

「自律」とは間断なく「自己決定」が求められる、きわめて崇高で高水準の概念なのである。「必修漏れ」騒動に象徴されるようなわが国を覆う単純な競争原理などではなく、それが北欧の教育の基盤となっていることに注目しておきたい。

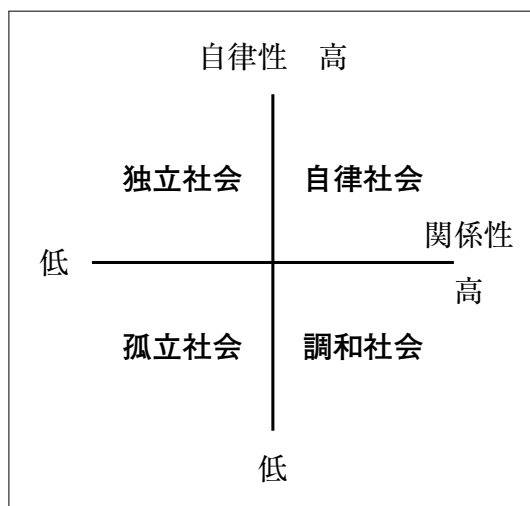
◆関係性の中で自律性を育てる営み

これまでに述べたことのベースになっている論文がある。

根本孝氏（明治大学）は、オランダ社会の動向を次のような図（右上）で説明している。（根本孝『自律社会としてのオランダ』ヒューマンルネッサンス研究所、2005 年より）

根本氏は、「関係性」と「自律性」の両方を満たした「自律社会」が、今後の望ましい社会のあり方だと指摘する。すなわち、自律した個人同士が強い絆で結ばれるような社会が望ましいありようだ、と言う。

昨秋に行ったウイスコンシン・ミネソタ両州の視察によると、「独立社会」の典型とみなされてきたアメリカで、「ラーニング・コミュニティの形成」を重要な目標として急速



な教育改革が進行している。一方、他との協調を大切にしてきたわが国では、「自律性の伸長」に重点が置かれるべきである。

「高まり」と同義としての「自律性」は、おそらく他との関係を遮断したところではどうも獲得できない。言い換えれば、道德の授業そのものがお互いの意見や存在までも尊重する風土の中で、少しずつ獲得していくものなのであろう。「共に学び合う」関係が初めて、「高まり」を目指す風土が形成されていく。

したがって、段階的に言えば、小学校では学びにおける「関係性」の構築に最大限の配慮をする。そうした風土のなかで、子どもたちは自分に自信を抱き、かけがえのない存在としての自覚を深めるのではないか。

それが基盤となって、他をも受け入れる寛容性と同時に、自らを堂々と主張する主体性がはぐくまれるのではないか。

それを、現行のカリキュラムにおいても、心おきなく追究できるのが道德教育である。「関係性」のなかで「自律性」を高める営み。圧縮して言えば、道德教育はこんなふうにも定義できる。理想社会の実現を目指すシミュレーションがここから始まるのである。

そうしたストラテジーのもとに道德の授業もまた構想したい。

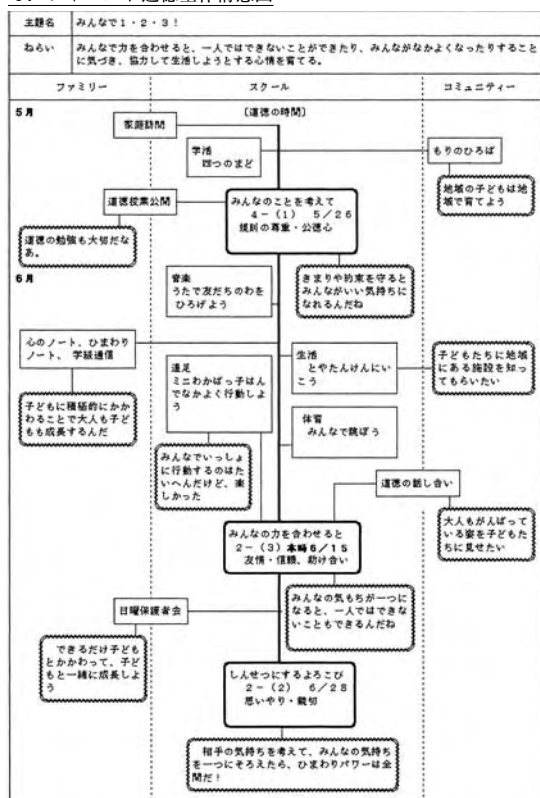
家庭や地域との連携で子どもが変わる

相模原市立串川小学校教諭 江藤 幸恵

1. はじめに

担任した2年生は、何事にも好奇心旺盛な子どもらしい子どもたちであった。しかし、それぞれがよいものを持っているにもかかわらず、いろいろな方向を向いてしまうために、もっているパワーをうまく生かすことができない。そんな子どもたちが、ぶつかり合いながらも、みんなで力を合わせて助け合うことができるようになったのは、家庭や地域と共に取り組んだ道徳がきっかけであった。

4. フィールド道徳全体構想図



本校では、道徳教育のあり方を家庭や地域で意図的・計画的に連携を図っていこうとする「フィールド道徳」を構想し(上図参照),

保護者や地域の方々と授業づくりを行ってきた。これらの共同推進者と話し合いながら構想を立て、まず一次として「みんなが気持ちよく」(光文書院『ゆたかなこころ』/2年生)できまりや約束を守ることの大切さについて話し合い、きっかけづくりをした。二次の「みんなの力を合わせると」では(下図参照)、授業の中で保護者や地域の方々に「第九」を歌っていただき(写真)、子どもたちは「みんなで力を合わせることはすばらしい」ということを実感することができた。



「みんなの力を合わせると」指導案 <2- (3) 友情・信頼、助け合い> (2) 展開

預 め 時	体育科の長なわで、友だちと一緒に遊ぶのは、難しいと感じている。 子どもたちの元気を認めつつ、けじめある生活をしてほしいと願っている。 大人もがんばっていることを、子どもたちに見てほしいと思っている。								
資料「どこがちがうの?」(自作資料)									
時 間	<table border="1"> <thead> <tr> <th>学 習 活 動</th><th>留 意 点</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>導入 ①みんなで一緒に「木」の絵を描き、その時の気持ちを発表する。</td><td>・グループごとに白い紙を渡し、3分間で、みんなで一緒に木の絵を描くように指示する。</td></tr> <tr> <td>展開 ②資料「どこがちがうの?」を読んで話し合う。 ○はじめの日のそうじと次の日のそうじは、どこがちがうのだろうか。 ③どうしてそんなちがったのか、考えてみよう。 ④ボランティア先生の、みんなで一緒に一つのことをやりとげた時のお話を聞く。</td><td>・できなかったときとうまくできたときのちがいを比べて、どんな気持ちがあったから、結果がちがったのかを明らかにする。 ・「第九を歌う会」に参加したときの経験を話していただき、そのあと共同推進者、地域の方、教師と一緒に「第九」を歌い、心が一つになることを味わえるようにする。</td></tr> <tr> <td>まとめ ⑤今日学習したことを、キーワードにまとめる。</td><td>・「みんなでいっしょに」を中心に、子どもたちから出た言葉でまとめる。</td></tr> </tbody> </table>	学 習 活 動	留 意 点	導入 ①みんなで一緒に「木」の絵を描き、その時の気持ちを発表する。	・グループごとに白い紙を渡し、3分間で、みんなで一緒に木の絵を描くように指示する。	展開 ②資料「どこがちがうの?」を読んで話し合う。 ○はじめの日のそうじと次の日のそうじは、どこがちがうのだろうか。 ③どうしてそんなちがったのか、考えてみよう。 ④ボランティア先生の、みんなで一緒に一つのことをやりとげた時のお話を聞く。	・できなかったときとうまくできたときのちがいを比べて、どんな気持ちがあったから、結果がちがったのかを明らかにする。 ・「第九を歌う会」に参加したときの経験を話していただき、そのあと共同推進者、地域の方、教師と一緒に「第九」を歌い、心が一つになることを味わえるようにする。	まとめ ⑤今日学習したことを、キーワードにまとめる。	・「みんなでいっしょに」を中心に、子どもたちから出た言葉でまとめる。
学 習 活 動	留 意 点								
導入 ①みんなで一緒に「木」の絵を描き、その時の気持ちを発表する。	・グループごとに白い紙を渡し、3分間で、みんなで一緒に木の絵を描くように指示する。								
展開 ②資料「どこがちがうの?」を読んで話し合う。 ○はじめの日のそうじと次の日のそうじは、どこがちがうのだろうか。 ③どうしてそんなちがったのか、考えてみよう。 ④ボランティア先生の、みんなで一緒に一つのことをやりとげた時のお話を聞く。	・できなかったときとうまくできたときのちがいを比べて、どんな気持ちがあったから、結果がちがったのかを明らかにする。 ・「第九を歌う会」に参加したときの経験を話していただき、そのあと共同推進者、地域の方、教師と一緒に「第九」を歌い、心が一つになることを味わえるようにする。								
まとめ ⑤今日学習したことを、キーワードにまとめる。	・「みんなでいっしょに」を中心に、子どもたちから出た言葉でまとめる。								
お ま け	再び、みんなで一緒に「木」の絵を描き、「一緒にやる」ことの意味を体験する。 家族や友だちと力を合わせてできたことについて、図ましの言葉を書けるようにする。 大人もがんばっていることを、これから子どもたちにも伝えていこう。								

2. 子どもはこのように変わった

(1) 子どもの行為が変わった〔表Ⅰ〕

	指導前の子どもの様子	指導後の子どもの様子
授業開始時刻	・トイレに行ったり、保健室に行ったり、けんかをしたりしていて、開始時刻になっても、授業を始めることができない。	・学習用具をたくして待っているの、決まった時刻に授業を始めることができる。
グループ学習	・順番を決めるところでけんかになって、音読の練習までいかない。	・みんなで順番を決めて練習ができる。お互いにアドバイスし合うことができる。
そうじの取り組み	・そうじをするより、友達の非を見つけることに終始し、そうじができない。	・班長が役割分担をし、それにしたがってそうじを行うので、時間内でそうじが終わる。

(2) 子どものものの見方・考え方が変わった〔表Ⅱ〕

指導前の子どものものの見方・考え方	指導後の子どものものの見方・考え方
①自分の欲望のまま。	①自分の欲求をコントロールできる。 みんなでやることの楽しさを感じられる。
②自分のことしか見えていない。	②自分のまわりに友達がいることが見えてくる。
③ルールを無視して、自分勝手な行動をする。	③ルールにしたがえば、いろいろな問題も生まれないことがわかる。

(3) 子どもの変化について

行為だけが変わったのではなく、ものの見方・考え方まで変化している。

表Ⅰであげたように目に見える行為が変わったのは、表Ⅱで示したようにものの見方・考え方が変わったからである。

ものの見方・考え方(目に見えないもの、心)は、すべての行為を生む「もと」である。

根底にあるものの見方・考え方が変わることによって、行為が変わってくるのである。

何週間後かには、元の状態にもどるかもしれない。

1回の学習で身につくものではない。しばらくして、元の状態にもどるのは普通のことである。

ある子はもどる、ある子は少しもどる。

どの子も同じではなく、子どもによって違ってくる。何度も繰り返すうちに、全体の足並みがそろってくる。

もどっては学習し、学習して進み、またもどることの繰り返しが教育である。

もどることはいけないことではない。ありのままの子どもの姿である。繰り返すことで学習したことが身についてくる。

3. 子どもを変えたものは何か？

- (1) 保護者や地域の方々が協力して「第九」を合唱する姿を見せたことにより、大人の本気の姿を感じたこと
- (2) 保護者や地域の方々の努力や協力の様子を自分の家で見たり、道徳の授業で話し合ったりしたことで、ねらいとする価値を主体的に自覚できたこと
- (3) 「やりなさい」と言われる→しぶしぶやってみる→うまくいった→うれしい、を繰り返し行ったことにより、協力し合うことを身をもって学んだこと
- (4) 家庭や地域の方と共に道徳の授業づくりを行ったことで、家庭や地域の意識が高まっていったこと
- (5) 学校での道徳教育の様子を受けて、家庭や地域が学校と同じ視点で子どもたちを見守ったこと
- (6) 保護者や地域の協力で授業を行ったことで、人の輪が広がり、学校だけではできない力で子どもの心を動かすことができたこと

心の高まり・広がりを実感できる道徳学習

学校・家庭・地域社会が一体となって進める心の教育の実践から

市川市立新浜小学校教諭 本多妃佐子

1 地域と共に歩む学校

市川市立新浜小学校では、「夢を持って、生き活きと活動する心豊かな児童の育成」を学校目標に掲げ、「地域に開かれた学校、地域に根ざした学校」を経営方針として、教育に取り組んでいる。保護者や地域社会に学校の教育活動を公開しながら、情報を発信し、地域の教育力を生かした経営を進めることで、地域に信頼される学校、地域で子どもが生きる学校を目指している。

平成17年度には、千葉県教育委員会の「心の教育推進キャンペーン」の一環として、児童・保護者・学校評議委員・民生児童委員などが一体となって参加する道徳学習の公開を行った。そこでは、保護者や地域の方々に、参観者やゲストティーチャーとしてではなく、授業を構成する一員として参加していただいた。そのことは、子どもたちが自分自身を振り返ったり、また学校や家庭において大人と話し合ったりするきっかけづくりになったと考えられる。

今年度は、盲目のピアニスト島筒英夫さんとの「ふれあいコンサート」を核として、各学年の発達段階に即した島筒さんとのかわりをもち、保護者や地域の方が一緒に学習を進めてきた。

この2年間の取り組みは、学校や家庭、地域社会が一体となって子どもたちの心の教育にかかわり合おうとする気運の高まりを生みだしつつある。

2 平成17年度「心の教育推進キャンペーン」地域授業公開

第3学年の実践



展開

学習活動と主たる発問	予想される児童の反応	時配	支援の手立て、留意点
○本時の学習の導入をする。 1 みんなから言われるとうれしい言葉は何ですか。	・だいじょうぶ？ ・一緒に遊ぶう ・ありがとう	5	
○資料を読む。 ○学習カードを見て、自分が一番言いたい「ありがとう」はどんなことか考える。 2 自分が一番言いたい「ありがとう」だと思うことと、それを選んだ理由をワークシートに書きましょう。	・ぼくは困っているときに「だいじょうぶ」と声をかけてくれることだと思う。 ・私は自分のよいところを分かってくれることだと思う。	10	○各自が自分の考えをしっかりと持てるように、時間を十分に確保する。 ○自分の考えと合うものがなければ資料にはない事例を付け加えてもよいこととする。また、複数の選択も認める。
○グループごとに聞き合う。 3 グループごとに友だちの意見を聞き合います。	・～さんが「ありがとう」と思うことについてもう少し詳しく教えてください。 ・自分の考えとだいたい同じだ。	8	○グループを回り、共感的に意見を聞くことで、自分の考えに自信をもてるように援助する。また、そのことにより、よりよい聞き方のモデルを示す。
○全体で話し合う。 4 自分の選んだ「ありがとう」にネームプレートを置きましよう。	・そういう考えもあったんだ。	12	○話し合いを全体に広げるために、ネームプレートを置いて全員の考えを明らかにする。
5 友だちへの質問はありますか。			

「たくさんありがとう」学習カード
氏名 ()

- 1 あなたが一番「ありがとう」と思うことに○をつけましよう。
その理由も書きましよう。
- ①「おはよう」のあいさつで元気をくれる ② 毎日のせわをしてくれる
③「さようなら、またあした」と見送ってくれる ④ ほいものを買ってくれる
⑤ 自分の知らないところで、生活をまもってくれる ⑥ わからない時、教えてくれる
⑦ がんばったことをほめてくれる ⑧ 自分のよいところをわかってくれる
⑨ ほめられたら、いっしょによろこんでくれる ⑩ いっしょに遊ぼうとさそってくれる
⑪ こまっている時、「どうしたの？」と声をかけてくれる
⑫ なやみ事がある時、しんぼう強く聞いてくれる
⑬ しゃべいても、「だいじょうぶだよ」とはげましてくれる
⑭ そのほか ()

主題名 たくさんのありがとう

内容項目 尊敬・感謝 2—(4)

ねらい 毎日の生活で、人々に支えられ助けられていることに気づき、感謝する気持ちをもつ。

授業の様子 (○番号は学習カード参照)

T：Aさんのお母さんはどうですか。

A：娘と同じ⑦番を選びました。

T：Sさんのおばあちゃんはどうですか。

S：私は①番を選びました。

T：質問はありますか。

C：④番を選んだ人は何を買ってもらったとき、そう思うのですか。

C：ゲームです。

(略)

C：⑭番の「そのほか」は、何ですか。

C：ぼくを生んでくれたこと。

C：誰に言いたいのですか。

C：お母さんです。

(略)

C：校長先生は何で⑫番を選んだのですか。

校長：悩みがある時は、誰かに聞いてもらおうと、心が晴れてくるでしょう。だから黙って話を聞いてくれるとうれしいと思います。

C：K先生は何が欲しいのですか。

K先生：おいしいお酒かな。

C：何で私のおばあちゃんは①番を選んだの？

S：一日の始まりに気持ちの良い挨拶をしてくれると、「今日も一日元気でがんばれるな」と思えるでしょう。反対に、挨拶をしても返してくれないと、「どうしたのかな」と心配になります。

児童の感想から

自分の知らない「ありがとう」が私の周りにはたくさんあることがわかった。いろいろな人にお話を聞かせてもらって、今まで知らなかったお母さんの仕事や行徳の町の人々の苦労がわかった。もっと遠くの、会ったことのない人にお話を聞くことができると、もっといろいろな「ありがとう」に気づくかもしれない。

参加者の感想文から

「ありがとう」という言葉が日常生活の中に

たくさんあるにもかかわらず、私はあまりその言葉を言っていないことに気づかされました。今日からは家の中で、「ありがとう」という言葉がたくさん聞けるように、母親である私から言わなければいけないと思いました。

3 平成18年度「島筒英夫さんとのふれあいコンサート」を通して

第6学年の実践

主題名 やり抜く力、強い心

内容項目 勇気・努力 1—(2)

ねらい 身近な人が努力し活躍する姿に触れ、目標を持って努力しようとする心情を育てる。

児童の感想から

私は毎日決められた時間の練習もしないで、母に叱られることがあります。島筒さんがプロのピアニストになるまでには、口では言い表せないほど練習したと思います。でもそのことを少しも感じさせない島筒さんのやさしい笑顔にもっと感動しました。

ぼくは行徳駅まで島筒さんを送りにいく仕事になりました。最初は緊張したけれど、ぼくの右の肩に島筒さんの手を置いて、ぼくが前を歩きました。「階段が3段あります。10センチぐらいの段差です。」と言うと、「そうだね。ここが玄関だね。」とおっしゃったのでびっくりしました。

保護者の感想から

本当に素晴らしい時間を過ごさせていただきました。島筒さんのお話は、子どもたちに強さと優しさを与えてくれたと思います。『ぼくは、ぼく』の歌は、「自分に自信を持って。」「一人ひとり違っていいんだよ。」とエールを送ってくれたようです。



人とのかかわりの中で育つ子ども

—「林先生とゲートボール」(自作資料)の実践から—

富山市立堀川小学校教諭 高野 力郎

子どもの心の高まりをとらえるには、1時間の授業は無論であるが、その後の子どもの暮らし全般をとらえ、事実をつなぎ合わせながら探ることが望ましいと考える。本稿では、第4学年の道徳と総合的な学習の時間とを関連させた総合単元的な授業「ゲートボール」におけるAさんの歩みから、子どもの心の高まりについて考えてみたい。

1. 「ゲートボール」の材性と本時までの歩みについて

ゲートボールは、5対5の集団ゲームである。自分のボールを第1ゲートに通過させ、作戦に応じて、正確な位置にボールを打つことが求められる。

時には、ボールの位置が10cmずれるだけでも、チームの優劣が決まる。一プレイヤーの一



打によって勝敗が左右するのである。したがって個々の子どもには、正確な一打を打つ技術は無論、ここ一番での勝負強さが何より大切になる。また、勝敗が必ずはっきりすることから、勝者と敗者との明暗の差が出る。このことは、勝敗をめぐる、自分、仲間、相手を意識するきっかけとなる。

昨年度から子どもたちは、地域でゲートボールをしている林先生との練習会や、子ども同士のチーム練習を通して、おおよその基本的な技術、動作ができ、作戦が立てられるようになってきた。本年度、子どもたちは、自分たちの力が学校の外でどれだけ通用するのか、試したいと願うようになった。やがて、

子どもたちは地域で開催されているゲートボール大会に参加したり、自ら放課後に出かけ、ゲートボールをするお年寄りに教えてもらったりするようになった。

2. 本時のねらいについて(内容項目/不撓不屈)

子どもたちは、資料文『林先生とゲートボール』にふれる。資料文には、林先生のゲートボールとの出会いから、現在に至るまでの話がかかれてある。全国大会での大失態を契機に練習に真剣に打ち込むようになった思いや、大病を思いやめようと思ったものの、仲間との憩いの時間の楽しさを忘れられずゲートボールを再び続けた思いを知ることができる。

子どもたちは、これまで指導してくださった林先生のゲートボールに対する熱意を改めて知るだけでなく、林先生の生きざまを目の当たりにするであろう。林先生の生きざまにふれることで子どもたちは、手応えを感じることができず諦めようとしている自分の弱さをみつめたり、自分の可能性を信じ、何事にもひたむきに取り組もうとする前向きな自分をみつめたりすることを期待したのである。

3. 本時とその後におけるAさんの動きから

教師が資料文を読み、その直後にAさんが話をしてきた。Aさんは、以前からゲートボールを上手になって、地域の大会に出て、優勝したいという願いをもっていた子どもである。そのAさんが現在の穏やかならぬ心境を話してきたのであった(資料①参照)。

一見、今後の決意を語るAさんのようであるが、話す姿には力強さが感じられず、実感

資料①

林先生もやめようと思ったときもあったでしょう。私もゲートに入らないときがあって、ゲートボールのことが嫌になって、立ち止まりそうになった。だけど、私は立ち止まらなかった。私にはまだ上手になる可能性があるでしょ。時間もあるでしょ。だから立ち止まるのは早いかなと思った。でも、これを読んだら、ゲートボールは失敗してたまに嫌なこともあるけど、私は好きだし、立ち止まってやめたら何もできなくなるから、自分に可能性があると思って諦めずにやりたい。

が今ひとつ伴わない言葉が連なる。Aさんは、現在の不安な面持ちを無理に払いのけようとしているように思えた。Aさんの話を聴き、B君やC君が話をした（資料②参照）。

資料②

B君

ぼくは相撲部に入っている。練習はきついし、強くなれないからやめようと昨年思ったことがある。やめようと思ったことあるけど、ずっと教えてくれた6年生に申し訳なくて、やめるのを踏みとどまった。今は続けたおかげで、楽しくなってきた。だから続ける心は大切だなって。C君

Aさんは、嫌になったって言っていたでしょ。ぼくは、嫌になったら終わりだと思うのね。文の中で林さんは、くやしいと思ったと書いてあるけど、嫌になったとは書いていない。まだまだ練習が足りないって、前を向いている。してしまったことはもう取り戻せないから、後悔しても取り戻せない。僕もやってしまったことを悩むより、次の作戦を考えていきたいと思った。

B君は、相撲部における自らの体験を振り返った。練習をしても成果があがらずやめようと考えたものの、自分を踏みとどまらせた6年生との出会いを思い起こしている。今の充実した活動に至るには、6年生の力があつたと感じ、感謝の心を確かにしている。そして、林先生の現在の姿から、続けることの大切さを噛み締めている。C君は、林先生の力強い歩みの源であるゲートボールへの愛情を感じているようである。Aさんに林先生のように打ち込むだけの愛情があるのかを問いかねながら、C君自身の行動の在り方について明らかにしようとしている。

Aさんは静かに仲間の話に耳を傾け、授業の後半、訥々と語るのである（資料③参照）。

資料③

みんな話を聞いて、1ゲートで失敗して、今まで私はくよくよしていた。次はがんばるとか、次のことを考えていなかった。ゲートに入らなくても、どこが悪かったのかを考えて、次にいかせる私になりたい。

Aさんは、仲間の話を聴き、自分の素直な気持ちをみつめ、これから歩む自分の道筋を

確かにしていこうとしているように思われた。その日からAさんは、放課後自ら地域のゲートボール場に赴き、練習を続けた。そして夏休み中に行われた市民体育大会、県民体育大会に出場し、見事優勝したのである。

2学期、私の机の上に、Aさんのゲートボールノートが置かれてあった。そのノートには、日々の練習や試合のことが詳細に書き綴ってあった。最後のページからは、続けることの大切さを自分なりに納得したAさんの姿がうかがえた（資料④参照）。

資料④

私は、ゲートボールを続けてきて本当によかったと思いました。一番の思い出は、すべての大会で優勝できたことです。だけどそれよりも、もっとうれしいことがありました。それは、つらい時も、楽しい時も一緒にがんばることができた仲間ができたことです。そして、私は仲間のことを思いやる大切さを感じました。こんなに真剣に考えたのは初めてです。

4. Aさんの心を高めた人との出会い

Aさんの心を高めた要因には人との出会いが大きく関係しているように思われる。Aさんには、三つの出会いがあった。一つ目は、ゲートボールの師である林先生との出会い。二つ目は、自分の心持ちを汲み取り、共に考え合う級友との出会い。三つ目は、大会や大会に向けた練習中に苦楽を共にしたゲートボールチームの仲間との出会いである。

今回の実践を通して、様々な人とかかわりから、人の心情や意思にふれながら自らをみつめることの大切さや、体を通して実感しながら自ら学んでいく大切さを、Aさんは私に示唆してくれたように感じている。



道徳授業は、真っ向からの直球勝負に限る！

白山市立明光小学校教諭 松下 浩一

1. 「子どもの心が高まる授業」とは

道徳において「子どもの心が高まる授業」とは、どのような授業をいうのか。私は次のように考える。

- ・自分の生き方を思わず見つめ直さざるを得ない授業
- ・「あんなふうに生きたい」「こんな生き方じゃだめなんだ」「こんな価値を大切にしていきたい」ということに気づく授業

このような授業を目指すために、私が大切にしている道徳のキーワードは、“自省”と“希望”である。自分自身を素直に格好つけずに省みること（自省）ができない限り、道徳的な価値を本当に獲得したことにはならないし、期待される変容にはつながらないであろう。しかし、“自省”ばかりでは大きな発展はのぞめない。反省ばかりを繰り返しては、自然と暗くなり、明るく大きな一歩を踏み出すことはできづらいであろう。やはり、「この人のように生きたい」「このようなことのために力を発揮していきたい」というあこがれにも似た感動が“希望”へとつながり、大きく前へ踏み出すことができるようになる。このように自省を促し、希望を与えていくことを大事にしながら、私は道徳の授業を行っている。

（資料①）子どもの実態

ある児童が、終わりの会に「Kさんは、担任の先生の前ではおとなしいけど、他の先生の前ではすごくわがままで、このままではいけない」という報告があった。確かにKさんの言動はわがままで周りの友達にも迷惑をかけていた。しかし、その周りの子どもたちもKさんのことばかりは言えず、係や委員会の仕事は忘れがちであったり、他の人のことはかわらないでいこうという風潮があったり、という傾向があった。

2. 自省を促し希望を与える授業構築のために

では、どのようなことに配慮して授業を構築すれば、子どもの心が高まる授業になるのか。私は、常に直球勝負で子どもに対峙する。変化球やクセ球はいらない。ストレートでガンガン子どもに迫っていく。では、その直球というのは何か。それは、子どもの実態をえぐり出した「本物の生きた資料」であり、「生き方に迫る発問」である。

例えば、5年生の担任時、次のような子どもの実態があった（資料①参照）。

この実態を受けて、次のような発問と資料で授業を構築してみた（資料②参照）。

子どもたちは1の発問に対して、ミニ作文を書いている段階から真剣に取り組んでいた。自分たちのクラスの問題であり、高学年としてこれでよいのかという意識の中で書いていたからである。紙幅の都合で多くは掲載できないが、次のような思いをぶつけてきた。

「自分は高学年らしさとして、集中して取り組んだり、低学年の見本として行動したりという点ができていたら成長したといえると思う。」

「5-1は、もっと心の成長が必要です。楽しいところはこのままでいいけれど、勉強するときと遊ぶときのけじめをちゃんとつ

(資料②) 発問と資料

生き方に迫る発問と主な活動内容	本物の生きた資料
1 <自分が成長した状態とはどんな状態ですか？> <5-1が成長した状態とはどんな状態ですか？>	◇1の発問に対して各自が書いた作文を紹介する
2 <みんなの成長の話を聞いて、自分には何が足りないと思いますか？>	
3『高学年のポジションは89名全員』の話をする	◇スペシャルオリンピックスの資料を読み上げる。
4 スペシャルオリンピックスの実話をする	
5 <自分が高学年としての金メダルを取れるときはどんなときか？>	

けて、人のことをもっとよく考えて、周りの人と意識をつなげていけるように成長していくとよいと思う。」

以上のようにクラス全員の作文を紹介した上で、2の発問を投げかけたところ、ほぼ全員の手が挙がった。

- ・集中力、責任感、クラスのめあて意識
- ・協力しようとする心……など

どれも高学年らしさとして身につけてほしいことがばかりが意見として出てきた。その後、3の話を告げた。

「高学年にはちゃんとポジションがあります。

野球にサードやレフトといったポジションがあるようにです。高学年のポジションは5年生89名全員です。一人でも高学年のポジションからはずれると、大きな穴が空くことになります。委員会しかり、係活動しかりです。穴が空いた場合、誰かがその穴をカバーすることになります。その穴は今どれだけ空いているのでしょうか。」

神妙に聞き入る子どもたち。最後にクラス全体の理想の姿（希望の姿）として、スペシャルオリンピックスの実話を紹介した。次のような話である。

「数年前にシアトルで行われたスペシャルオリンピックスでのこと。9人の選手たちが100ヤード走のスタートラインに立った。選手は全員が心身障害者だ。号砲とともに、全員がスタート。全力疾走とはいかないものの、とにかくゴールを目指し勝つために走ろうという意欲が感じられた。ところが、

一人の少年がアスファルトにつまずき、2回も転んで泣き出した。残る8人は、少年の泣き声を聞くとスピードを落として振り返った。そして、全員が向きを変えてコースを戻っていったのだ。8人全員の選手が……。一人のダウン症の少女は、かがんで少年にキスをし、『こうすると痛くなくなるわ』と言った。そして9人で腕を組んでゴールまで歩いた。競技場にいた人たち全員が立ち上がり、声援がしばらく鳴りやまなかった。

(中略)

『ろうそくが別のろうそくに灯をうつしても、何も減りはしない……』

3. おわりに

この話を受けて<自分が高学年としての金メダルを取れるときはどんなときか？>と発問して授業を終えた。この発問に対する子どもの思いを一つ紹介する。

「私は、高学年の金メダルを取れるときは、みんなで心の中に協力のろうそくをともしたときだと思う。一人だけついていないときや周りの灯が小さいときなどは、みんなでもし合って仲よく責任感のあるクラスにしていこうと思う。」(Y子)

問題となったKさんの行動も、そしてクラス全体の雰囲気も高学年らしさが漂い始めた。今後も直球勝負で立ち向かうことで、自分自身と向き合う状況をつくり続けていきたい。

キャリア教育の視点にたつ 心に響く道徳授業をめざして

北九州市立泉台小学校教諭 渡部多磨美

1. キャリア教育の視点にたつた道徳教育

少子高齢化、高度情報化、家庭の教育力の低下など、学校教育をとりまく社会環境は大きく変化してきている。犯罪の低年齢化をはじめ不登校やひきこもり、フリーター・無職青年の増加等が社会問題となっている。

これは、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力だけでなく、児童が主体的に進路を選択・決定する能力や態度が育っていないことも要因ではないかと思われる。

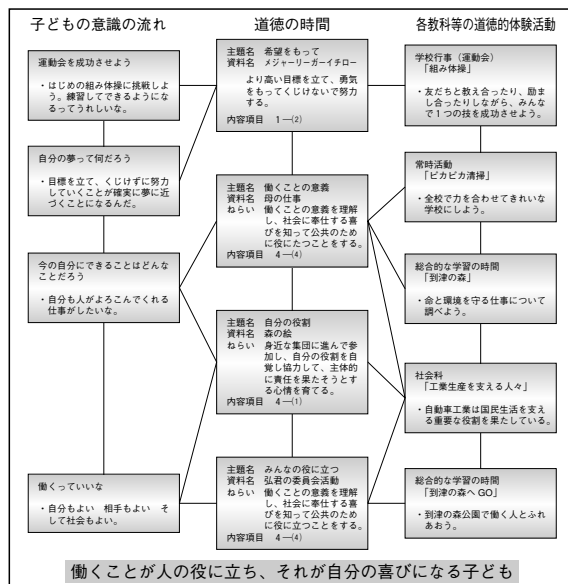
だからこそ、児童一人ひとりに豊かな心と社会の中での自分の生き方、考え方を培っていくキャリア教育が求められている。「働く」という日常の営みの中で、人はどんな思いや願いで働いているのかを感じたり、自分が頑張ったことが認められたり、「働いてよかった」という喜びを感じる体験を重ねたりして、働くことの意義を知り、自分も社会の中でこんな役割を果たしたいという願いや実践力を培っていく道徳授業の必要性を感じている。

2. 望ましい職業観を養うための体験活動

昨年から、全校で取り組んでいる「ピカピカ大作戦」の廊下をたわしで磨く活動により、きれいになっていくことを実感したり、汗を流す、すがすがしさを体験したりすることで、「最後までやり遂げたい、きれいにしたい」という心の高まりがみられるようになった。

また、総合的な学習の時間^{いとうづ}に、学校の近くにある「到津の森公園」の学習を通し、「自然保護・種の保存」の役割を果たすために働く飼育員さんと獣医さん、ボランティアの人たちの仕事を体験しながら、仕事内容や働く

体験活動の振り返りを生かす各教科等との関連を図った構想図



人の気持ちを少しずつ感じられるようになった。こうした働く人の思いをはじめ、自分が役に立っているという実感や働くことによって得られる成就感・喜びを道徳の時間に振り返ることで職業観を深めていきたい。

体験活動の振り返りを生かす各教科等との関連を図った構想図を上に示す。

3. 指導の実際 (資料名「母の仕事」)

主人公「ひろ子」と自分を重ねながら、母の働くことの喜びを通して、働くことの意義・喜びを十分感じ取ることでできる資料である。

導入では、「ピカピカ大作戦」や係の仕事をするときどんなことを考えたり、思ったりしていたかのアンケート結果(仕方ないから37%, 少し嫌だな28%, 頑張ろう16%, したくない19%)からそのときの気持ちを想起さ

せた。そして、登場人物の顔絵を提示し、BGMを流しながら資料を読み聞かせた。

毎日疲れきって帰って来る母の腰をもみながら「やめればいいのに」と言うひろ子のことを、「自分と同じ。お母さんはそんなに働いて何が楽しいのかな、やめてしまえばいいのに」「自分だったら、指が痛くて迷惑なことだ」という気持ちが多かったが、「こんなに頑張っただいじょうぶ、働きすぎないで」という母をいたわる思いも出された。

そこで、「寝たきりの人たちが喜んでくれる笑顔が、母さんのあしたの仕事を支えてくれる大きな力になっている」という言葉を手がかりに、話を聞いたひろ子の気持ちと自分を重ね、心情円盤を操作しながら考えるようにした。

書く活動では、カラーの挿絵入りのワークシートで母の話す表情をより鮮明に伝え、ひろ子の気持ちの変化を自分と重ねながら書くようにした。また、BGMによって登場人物の心情に浸るようにした。

グループによるワークシートに書いた考えを交流する場面では「母の仕事に対する喜びや誇り」について、到津の森公園で働く外平さんや山上さんの姿や言葉、自分たちの活動を振り返りながら話し合い、考えを深めることができた。小集団での交流は効果的であった。〈児童の心の高まり（授業記録から）〉

- T：仕事のことを話すとき、お母さんが美しく感じられるのはなぜでしょう？
- C：やりがいのある仕事をして、人に喜んでもらえていることが本当にうれしいから。
- C：大変だけど人の役に立つこと、自分を待っている人がいることがあしたの力になる。
- C：相手が喜んでくれることが、自分の喜びに感じられるくらいやりがいのある仕事。
- C：自分は楽な仕事がいいと考えてしまうけど、人のために仕事をして、嬉しくなるお母さんはすごいと思う。
- C：山上さんたちも生き生きと、「この仕事は責任があって、たくさんすることもあれるけど好きだ」と言っていたように頼り

にされて、役に立つことが喜びなんだ。

T：みんなのお母さんはどうだろう？

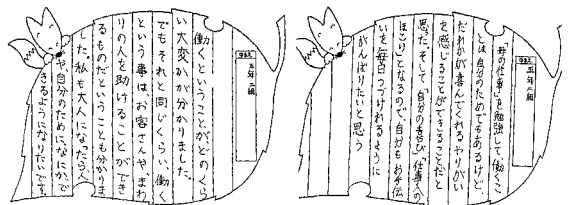
C：そういえばきついか言ったりするけど、仕事は楽しい、頑張らなきゃと言ってた。

T：大変な仕事も人の役に立ったり、誰かが喜んでくれたりすると嬉しいね。笑顔やありがとうの気持ちを自分の喜びやあしたの力にしているのかな？

T：実は皆さんに、家の人がどんな気持ちで働いているかお手紙を預かっているので渡しますね。

終末では、家の人からの手紙を一人ひとりに手渡し、じっくり読むようにした。

思いがけない手紙に感動し、家族の仕事に対する思いや、仕事をする意義を改めて感じることができた。この思いの高まりを児童は次のように書いている。



「母の仕事」を通して、働く人たちの思いや願いをより明らかにすることによって児童の仕事や働くことへの意識の変容がみられた。

今後も、働くことが人の役に立ち、それが自分の喜びと感じられるような道徳授業を、児童とともに取り組んでいきたい。

最後に、子どもが授業後に書いた感想文を下記に示して終わりにする。

「ありがとう」の笑顔	わたくしは、これまで「働く」ということに考えてこなかった。でも、この授業を通して、働く人の笑顔や、仕事をする意義を改めて感じるようになった。お母さんの笑顔が、自分を支えているんだと気づいた。自分も、働くことが誇りになるようにしたいと思う。
母の手紙	母の手紙は、とても感動した。母は、毎日大変な仕事をしているけど、家族のために頑張っているんだと知った。自分も、母のように働くことが誇りになるようにしたいと思う。
父の手紙	父の手紙は、とても感動した。父は、毎日大変な仕事をしているけど、家族のために頑張っているんだと知った。自分も、父のように働くことが誇りになるようにしたいと思う。
お母さんからの手紙	お母さんからの手紙は、とても感動した。お母さんは、毎日大変な仕事をしているけど、家族のために頑張っているんだと知った。自分も、お母さんのように働くことが誇りになるようにしたいと思う。

子どもの見方・考え方を深める「道徳の授業」をめざして ～子どもの見方・考え方を深めるための「3つのポイント」～

大分大学教育福祉科学部附属小学校教諭 小野 勇一

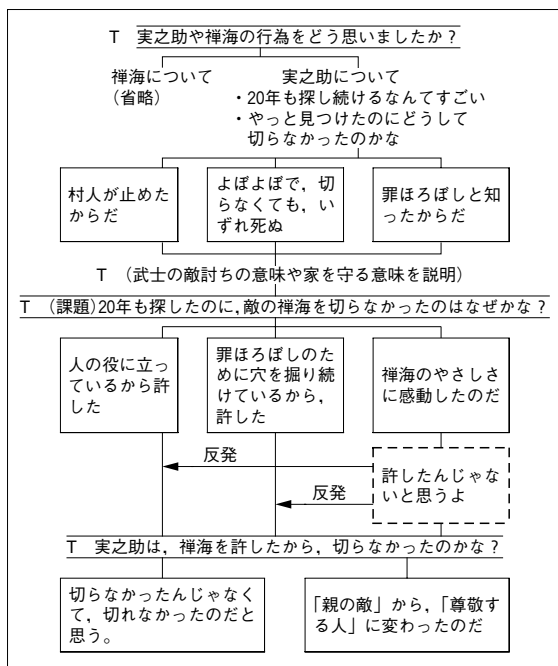
1. はじめに

道徳の授業は、自分の生き方を振り返り、人としてよりよい生き方を求めていく時間である。そのためには、子どものもつ見方・考え方を深めていかなければならない。見方・考え方を深めていくことが、心の高まりにつながっていくと考えるからである。

子どもが見方・考え方を深めるとは、どのような姿なのか。また、見方・考え方を深めるためには、どのような学習活動を展開していけばいいのか、「青の洞門」（光文書院『ゆたかな心』／6年）の実践を振り返りながらまとめてみる。

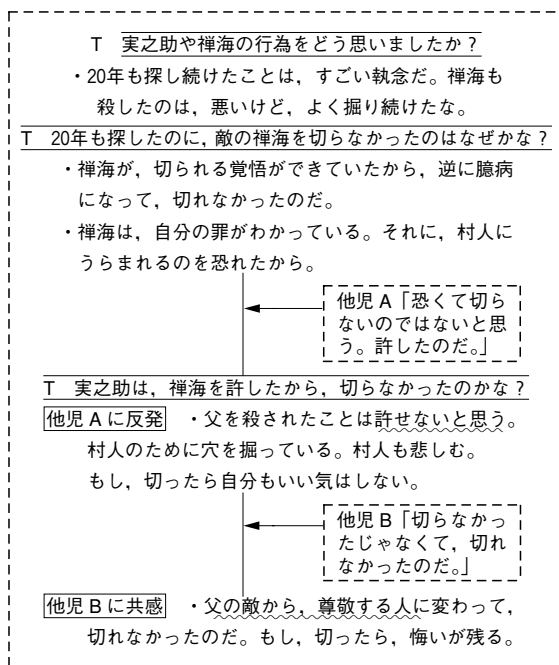
2. 「青の洞門」3—(3)の授業実践

(1) 授業展開の概要（一部省略）



子どもたちは、実之助が父の敵である禅海を切らなかったことに疑問を感じ始めていた。さらに教室全体が疑問を感じる状況になるように、私は「敵討ちの意味」「家を守る意味」を説明していった。そして、子どもの中に「実之助が切らなかったのはなぜか」という問題意識が生まれてきた。次にF児の学びの概要を紹介する。

(2) F児の学びの概要（一部省略）



F児の発言記録をたどると、F児の見方・考え方のようなものが見えてくる。ここでいう見方・考え方とは、登場人物の言動（生き方）に対する見方・考え方のことである。ここでは、禅海や実之助の言動（生き方）に対する見方・考え方のことである。F児の発言の変容を見ながら、F児の変容に影響したと思われる教室状況や教師の手だてについて考えてみることにする。

(3) F 児の発言の変容

禅海に対する F 児の発言	実之助に対する F 児の発言
殺したのは悪い ↓ 切られる覚悟がある ↓ 自分の罪をわかっている ↓ 村人のために掘っている ↓ 尊敬する人	すごい執念だ ↓ 村人にうらまれるかも ↓ 父を殺されたことは許せない ↓ 切れなかったのだ 切ったら、悔いが残る

このように、F 児の発言は変容している。禅海に対して「殺したのは悪い」というとらえ方から「尊敬する人」に変わっている。また、実之助に対しても「村人にうらまれるから、切れなかった」ととらえていたのが、「切ったら、悔いが残る」に変わっている。このように、F 児の登場人物に対するとらえ方は『表面的なとらえ』から『内面的なとらえ』に変容している。つまり、より登場人物の心の中に接近した状態であると言える。このような姿を見方・考え方が深まった姿ととらえる。

3. 「青の洞門」の実践から言えそうなこと

それでは、F 児が見方・考え方を深めていったのは、なぜなのか考えてみたい。

この授業の後、F 児は、「青の洞門」に見学に行きたいと言ってきた。理由は、禅海や実之助の「本当の気持ち」を知りたいということであった。つまり、F 児は自分なりに問題意識をもって授業に取り組んでいたと考えられる。授業において問題意識をもたせていくことは必要不可欠である。この授業では、実之助が切らなかったことを話題にし、学習課題に設定した。しかし、それだけでは、F 児が問題意識をもつことはなかったであろう。子どもの心の中により問題意識を際立たせるために、「敵討ちの意味」や「家を守る意味」を説明したのである。そうすることで、子どもの心の中に「切らなかったのは、なぜだろう？」という気持ちが、より大きく沸き起こっていくのである。

Point 1 …「なぜだろう？」という問題意識をもたせていけば、追求意欲を増し、子どもの見方・考え方を深めていけるのではないか。

F 児は、他児 A の「許したのだ」という意

見に対して、「父を殺されたことは許せない」と反発する。そして、「村人からうらまれる」という考えから、「村人が悲しむ。自分もいい気がしない」と考え方を変容させていく。また、他児 B の「切らなかったじゃなく、切れなかった」という意見を取り入れ、「切れなかった」の理由を自分なりに明らかにしていく。それが「敵から尊敬する人に変わった」という考え方である。このように F 児は他児の意見に反発したり、共感したりしながら自分の見方・考え方を深めていったと言えよう。

Point 2 …自分にはない他児の見方・考え方と関わらせていく。(板書などで他児との考えの違いを見せる)

F 児が自分の見方・考え方を深めていくきっかけとなったのは、他児 A の発言の後からである。「実之助が禅海を許した」という他児 A の発言後、『許したのかどうか』を全体に問いかけてみた。そして、「実之助は、許したから切らなかったのか」という『問題』が位置づいた。ここでいう『問題』は新たな課題ではなく、「実之助が禅海を切らなかったのはなぜか」という学習課題を解決するためのより焦点化された発問なのである。この焦点化された発問により、F 児は「許していない」という立場から「切れなかった」ととらえ、禅海や実之助に対する見方・考え方を深めていったのである。

Point 3 …学習課題(中心発問)の解決過程で生まれた『問題』を全体に問いかけることで、子どもの見方・考え方を深めていけるのではないか。

4. おわりに

歴史資料館への見学と合わせて「青の洞門」にも行った。実際に、目で見て手で触りながら長い洞門を歩いた。そこには、禅海の像を真剣な表情で見つめる子どもたちの姿があった。禅海の誠実な生き方に、直にふれた子どもたちは、心を大きく動かしたであろう。今後も心に響く授業づくりをめざしたい。



自分を変えていく「道德の力」を子どもたちに

——いじめっ子と言われて——

八洲学園大学教授 渡邊 達生

「正義」や「勇気」という言葉がある。だれもがその言葉の意味はつかんでいる。しかし、その「価値」や「力」にどのような期待を求めているのだろうか。

＜いじめっ子……と言われた事例から＞

小学6年生のA児は活発な女の子だった。グループ活動ではよくリーダーになって、グループをまとめていた。授業時間には、率先して発言をしていた。また、休み時間には戸外で活発に遊んでいた。

ところが、ある日、A児からいじめられていると、B児（女子）からの話があった。

ドッジボールでは、敵になると真っ先にねらわれるし、味方になると、「ぼやぼやしないでよ」ときつく注意をされる。普段の学級生活でも、目が合うとにらみつけられる。絵をかいていると、ばかにされる。

そんなことが、ずっと続いているという。

B児はおっとりした人柄である。A児にしてみれば、だらしないことに見え、注意しようとしていたのが、いつの間にか高圧的な態度になっていったのかもしれない。

私はA児と話した。しかし、B児のことを切り出すと、A児の顔は曇った。そして、不服そうな顔をして帰って行った。

2, 3日して、A児の母親に電話をした。母親によれば、A児は家で、自分は悪くない、自分はがんばっている、注意されて不満だ、と言っているという。そこで、悪いとか、悪くないとかいうことではなく、それを超えて、この事態をよくしていくにはどうしたらよい

かを親子で話し合ってみてくれないかと話したのだった。

それから数日して、A児が新しい雑巾を10枚ほど持ってきた。そして、「お母さんと縫いました。みんなで使ってください」と言った。

その時は、この雑巾の意味には気づかず、学級の子どもたちには、「Aさんが、お母さんといっしょに縫ってくれた雑巾です。新しい雑巾が必要な時には取りにきてください。特別雑巾です」と知らせた。みんなは大きな拍手をしたのだった。

その後、B児が来て、A児があやまってくれたことを報告してくれた。その時、はたと気づいた。A児の家ではあの電話の後、親子での話し合いが行われ、その結果として、雑巾が教室に来たのではないかと……。

A児は学級のために役立ちたいという思いをもっている。悪かった・悪くなかったではなく、そのような自分にできることを考えた。そして、教室をきれいにする雑巾を縫って持っていくということに気づいた。そして、母親とともに実行に移した。

結果、A児はみんなに感謝の拍手をもらえた。そして、そのことで、B児にあやまりの言葉を言う気持ちをつかむことができた。自分が間違っていなかったということにこだわっていたのでは、このような展開にはならなかっただろう。たとえ、無理にあやまったとしてもうらみが残ることになったのではないだろうか。

この雑巾は、ことあるごとに活躍することになった。給食中に牛乳瓶を倒した時、気分

の悪い人がもどしてしまった時、教室以外の場所を掃除したい時、習字の墨汁をこぼした時、給食の食缶を倒した時等々。そのたびに、「特別雑巾の登場」で、危機の場面は救われることになった。

人から「あなたはいじめっ子だ」という言い方をされた時、当の本人はもとより、家族も大きなショックを受ける。このA児やA児の母親の場合も、そうであったことだろう。「いじめられた」と言った人を非難する気持ちを抱くのも無理からぬことである。しかし、非難の応酬をしても、互いに不快感・不信感のはつのるばかりである。

そのような時、抜き差しならない現実から

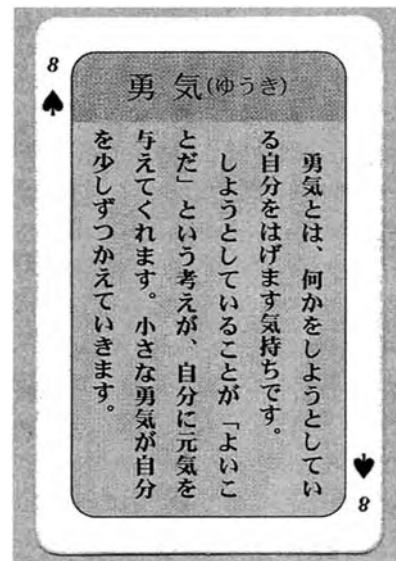
抜け出せる「勇気」があると、気持ちは楽になり、前向きになる。その勇気をもたらししてくれるものは、熟慮の結果得ることができる「正義」への信頼である。

この事例を通して、A児から「正義」と「勇気」の価値ある姿を学ぶことができた。

道徳の時間には、資料に重ねて、このような友達の価値ある人生を紹介したい。

また、日常生活でも、そのような生き方に価値を感じる意識を育てたい。

そこで、次のような道徳カードを作成し、学校や家庭で、トランプ遊びやカルタ遊びを通して、「道徳のもつ力」への関心を高めることに取り組んでいる。



豊かな心と未来を拓く力を育てる道徳教育

～単元的道徳学習の新たな広がり求めて～

弘前市小学校道徳教育研究会会長 工藤 浩一



1. 会員・組織

本研究会は、「弘前市小学校道徳教育研究会」という名称で、青森県弘前市・中津軽郡の小学校及び附属幼稚園の教員からなる研究団体である。

平成16年度までは、市内34校の会員で50名前後であったが、市町村合併に伴い、中津軽郡の多くの学校が新しく仲間に入り、今年度は42校合計72名の会員で活動が続けている。

会長1名、副会長3名、監事2名、常任理事12名、事務局1名からなる組織で活動し、管理職である会長・副会長を含め、常任理事が研究組織の母体となり研究会をひっぱっている。

本研究会は、弘前市小学校教育研究協議会（以下、小教研と称す）に所属し、会員相互が道徳教育に関することを研究協議し、道徳教育の振興を図ることを目的とし活動している。

現在の研究会の中心となる「単元的道徳学習」の考えが初めて研究・実施されたのは、平成10年度に開催された『第14回東北地区小学校道徳研究協議大会兼第19回青森県小学校道徳教育研究大会』のときであった。

その大会を契機に、現在に至るまで後述する「単元的道徳学習」の研究を進めてきている。大会以後、若干の会員や理事に入れ替わりはあったものの、研究に対する熱い情熱や道徳に対する思いはずっと受けつがれ、毎年 の定例研修会においては常に研究授業をもとに研究が進められてきている。特に最近では若手の先生方が積極的に授業を引き受け、研究部や常任理事の先生方の助言・指導を受け、また、若者らしい新しい観点と題材を開発しながらその力量を発揮してくれている。

隔年ではあるが、小教研では10月に一日研

修会が開催され、その日程に県内外の道徳教育に携わる有識者による講演をいただいて会員の見識向上に努めてきている。

以上のような活動を通して、会員ばかりでなく、すべての教職員が弘前市をはじめ青森県の道徳教育に貢献できるよう、研究会としては日々研鑽を重ね、子どもたちの道徳的な心情や態度の育成のために研究が続けている。

2. 年間の活動

①総会及び年度初め研修会

・年間計画の確認、研究テーマ研修等

②6月定例研修会（小教研Ⅱ 半日研）

◇研究授業、協議会

◇情報交換

③10月定例研修会（小教研Ⅱ）

・隔年で一日研と半日研を実施

◇研究授業、講師による師範授業、研究協議会、講演、学習会

◇各種大会、報告会（県・東北・全国）

④各道徳研究大会（東北・全国）への参加

⑤弘前市小学校道徳教育研究会研究紀要「道徳」発行

⑥弘前市小学校教育研究協議会紀要「実践のあゆみ」への寄稿

⑦常任理事会（指導案事前検討会等）

3. 研究内容

本研究会は、「豊かな心と未来を拓く力を育てる道徳教育」を主題に掲げ、単元的道徳学習を研究の中心に据えて、授業を実践してきた。道徳教育を通し、感動や思いやりを大切にしながら前向きな姿勢で未来に夢や希望をもって考え、判断し、実行できる力を育成していくことに重点をおいている。

その方法の一つとして、次からあげる「単

(資料)

元的道德学習」を紹介する。

①単元的道德学習の基本的な考え方

(1) 単元内の授業の流れ

◇道德の時間を中心に据え、事前・事後活動として、道德の時間以外の教育活動(教科、総合の時間等)を設定する。

(2) 道德の時間

◇目的とする主題に迫るための授業群(複数)を設定する。

◇授業群は、主題と関わり、連続性や発展性をもたせる。

◇読み物資料の読解中心にしない。

(3) 取り扱う価値

◇複数の価値をお互いに関連させて扱う。

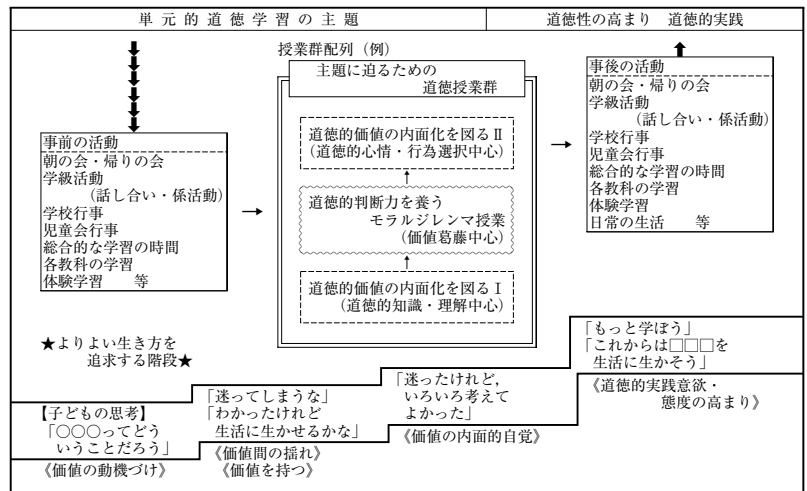
◇重点化する価値を単元の中で繰り返し扱う。

(4) 事前・事後

◇事前 主題に迫る動機付けとなるエピソードや体験等を扱う。

◇事後 単元の学習内容を子ども自身で発展させることのできる活動を扱う。

②単元的道德学習の構想図(資料参照)



・資料名 「一枚の写真から」

写真から自分自身を見つめ直し、心身ともに成長し続ける命であることに気づくとともに、自他の生命を尊重しようという心情を喚起する授業であった。



②師範授業及び講演 渡邊達生先生

(八洲学園大学教授)

・単元名 「未来へつづく命」

・資料名 「おばちゃん、がんばれ」

・講演 「人生を応援する道德」

本研究会の趣旨を理解されたうえで、『心のノート』や資料から、「命の本質」を子どもたちの言葉から導き出し、一人ひとりが、自分の命の姿を真剣に考える授業であった。



また、講演では、数々の童話をもとに、その中に内在する道德的価値についてのお話がなされた。

5. 今後の課題

「単元的道德学習」の考えを中心におき、様々な道德の授業の在り方を探りながら、現場での実践と充実につながるような研究を推進していきたいと考える。

4. H18年度の研究

今年度のテーマ

“いのちを大切に子どもを育てる道德教育”

世の中が多様化され、急激な変化の中で子どもたちを取り巻く環境も大きく様変わりしてきている。そのような中で、「生命の尊重」という価値は、現在の世の中に最も必要な道德教育における基礎をなす価値であると考えられる。各学年の発達段階に即して、「いのちを大切にする」心を育てるために研究を進めていくものとする。

弘前市小学校道德教育研究会一日研修会

平成18年10月25日に弘前大学教育学部附属小学校において行われた。

①研究授業 建部拓先生(附属小5・6年)

・単元名 「命を輝かせて」



Q：“学校と、家庭や地域との連携”という文言を目にしますが、道徳教育での“連携”をどう考えればいいのですか？

A：“連携”とは、一般的には「同じ目的をもった者が、互いに協力して物事を行うこと」という意味ですが、学習指導要領の総則、「道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、家庭や地域社会との連携を図りながら、……」にある“連携”の同じ目的とは、子どもたちに人として生きる力を身につけさせることです。

その「人づくり」のために、学校が家庭や地域社会のもつ教育力を十分に理解したうえで、道徳授業への参加や資料の開発協力や活用での、保護者や地域の方々の参画も考慮した年間指導計画を立案するなど、その学校なりの特色ある道徳教育が進められるように家庭や地域社会と“連携”していくことが求められていると思います。



Q：道徳教育の場として考えたときに、学校と家庭、地域社会との違いは何ですか？

A：「人づくり」という共通の目的はありますが、それぞれの学びの場の特質を、しっかりと把握しておく必要があります。それらをお互いに理解し合った“連携”を考えていきたいものです。

○学校では、教育活動全体を通して道徳的心情・判断力・実践意欲などの道徳性を養いながら、道徳の授業での計画的・発展的な指導によって、その道徳的価値を自覚させ実践力を高めていくことになります。

○家庭では、しつけによる教育が中心であり、親子・兄弟・姉妹などの異年齢関係の家族単位の集団が学びの場になります。ここでもさまざまな体験を通して道徳性を身につけていきますが、偶発的・一時的・個別的な学びともいえるでしょう。

○地域社会では、さまざまな人々との関わりの中で、おもに社会性を身につけていきます。ここでは、共有の行動目標をもった集団の中での体験を通しての学びが中心になります。地域の大人の指導者とのふれあいなど、縦の人間関係の中で地域の慣習や文化の体験、伝承の場となっていることも見かけられます。

それぞれの特質に違いはあっても、いずれの場も生きる力を身につけさせる「人づくり」の場であると考えたいし、そういう場であってほしいものです。



Q：家庭や地域の方々をゲストティーチャーとした授業を計画するときの留意点は何ですか？

A：子どもたちはさまざまな人との関わりの中で育ち、人として成長していきます。学校での教職員や友達との関わりだけでなく、保護者や地域の方々との関わりも大切です。

日常でのふれあいだけでなく、ゲストティーチャーとして道徳の授業に参加していただき、あらためて、その人らしさに会うことは、子どもたちの道徳的価値がさらに深まっていくきっかけにもなると思います。その際に気をつけたいことは、

○どのようなねらいで協力してもらうのか

○授業のどの場面で協力してもらうのか

○どのような形で授業参加してもらうのか（実演・講話・インタビュー……）

との連携について

平塚市立真土小学校教諭 山内 良夫

などを、しっかりと計画しておくことです。

そして、これらの計画をゲストとともに再検討する必要があります。子どもたちに「何を学ばせたいのか」の打ち合わせは欠かすことはできません。

また、授業後の子どもたちの様子の事後報告も、継続的な“連携”を考えれば当然の心がけだと思います。子どもたちの感想文や新たな問い合わせ事項などを心待ちにされている場合もあるようですよ。



Q：授業参観で道德の授業を、と考えているのですが……

A: 授業参観は、学校で行われている道徳教育を理解していただける良い機会だと考えたいですね。また、学校での学びの姿から、家庭では見られない子どもの一面を感じ取ってもらい、家に戻ってからも授業の内容の話題が続いていくような授業内容にしましょう。

実践例を紹介します。3年「はた・らく＜勤労＞」という資料で授業参観を行いました。その後、学級通信で子どもたちの授業感想を伝えるとともに参観者にも感想を募ったところ、次のようなコメントが寄せられました

○「はた・らく」が「はた＝まわり」が「楽（らく）」になるという見方・考え方を知り、私もとても勉強になりました。家で子どもに聞いてみたら、「はた・らく」をしっかりと説明してくれました。

○「はた・らく」という学習で、自分の家での役割を考えていたようです。自分自身も家族の一員として何か役に立ちたい、自分が働けば誰かが助かるという思いやり……そういった思いを大切に育てていきたいと、親の私もあらためて考えさせられました。

○私たちの子ども時代は家で働くことが当たり前で「イヤだな」と思いながらしていたことを思い出しました。あらためて「はた・らく」の意味を聞き、子どもたちはキラキラした目で聞いていたようです。

○今回のように授業で「はた・らく」を取り上げてもらい、今まではイヤイヤやっていたことが“良いこと”→“自信”につながっていくのではないかと思います。

こんなところから家庭との連携を進めていくのもいいのでは……



<明日の教育を考える>

教育再生と奉仕活動

八洲学園大学教授 山本 恒夫

はじめに

平成18年10月に教育再生会議が設置され、審議が行われている。その検討課題の中に、国公立大学の入学時期を9月に変更し、高校卒業から大学入学までの間に社会奉仕活動を義務付ける改革が入っている。その検討はしばらく後になりそうだが、早くも委員からの賛否両論が聞こえてくる。そのうち、奉仕活動の義務化問題は「教育改革国民会議」で激しい議論があった。ここで、あらためて奉仕活動の問題を考えてみることにしよう。

① 教育改革国民会議と中教審の提言

教育改革国民会議の「教育改革国民会議報告—教育を変える17の提案—」（平成12）で提言された奉仕活動の義務化は、小・中・高で奉仕活動を全員が行うようにするというところで、満18歳後の青年が一定期間、奉仕活動を行うことは将来的に検討する、というものであった。

この議論は、その後、中教審に舞台が移された。中教審総会でも賛否両論があったが、具体的な検討は生涯学習分科会に下ろして行われることになった。そこでは、ボランティア活動を長年にわたって推進してきた青少年団体や、非行からの立ち直りを支える実践人、教育・心理の専門家等の意見が、青少年の内面重視という点で一致したので、それを基本

とした奉仕活動のあり方を検討することに終始した。したがって、平成14年に出された中教審答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」では、義務化の提言はなされていない。

奉仕を言い出された曾野綾子氏が、ある新聞社からの依頼によって答申を読み、「とにかく義務化でなくてよかった」という一文を寄せられていたのを今でも覚えている。こちらにも、審議の過程で、キリスト教のいう奉仕と学校の奉仕活動を混同することだけは避けたつもりである。

その答申では、奉仕活動が青少年にかかわる今日のさまざまな社会問題（いじめ、暴力行為、ひきこもり、凶悪犯罪の増加など）を解く糸口になると考え、地域プラットホームの設置など、具体的な提言を行っている。そのことはさておき、ここでは奉仕活動が個人にとってどのような意味をもつか、という点を探っておくことにしよう。

② 個人にとっての奉仕活動

奉仕活動といえば、その意義を問う前に、その言葉が意味するところは何なのかという声があがるであろう。

ところが、奉仕団体などで活動をしてきた人々は、これまでの経験から概念の詮索は不毛で、そのようなことに時間を費やすよりも、活動することの方が先だという。中教審生

涯学習分科会では、奉仕活動を、対価を目的とせず、個人が社会の一員として地域や社会などのために行う活動とし、できる限り幅広く捉えることにした。したがって、それには、専門的能力やフルタイムで関わる必要が必要な活動から気軽に取り組める身近な活動まで、さまざまな活動が含まれることになる。そうすると、ボランティア活動との区別が付きにくい、その議論が不毛になるので、ボランティア活動という用語を用いることがふさわしい場合には、そのままボランティア活動といえよではないか、というのが生涯学習分科会の考えであった。

このような奉仕活動は、個人の側からみれば、次のような意義があるといえるであろう。

人間は生まれてから、次々と経験を蓄積して人間としての成長を遂げていく。新たな経験をすると、それが既に蓄積されている経験の中の関連する要素と結合して、その一部を変形したり、切り捨てたりしながら、新たに蓄積される経験を形成していく。

そのような経験には、奉仕体験活動、職業体験活動、自然体験活動などのような直接経験もあるし、教科書、本、テレビなどに依ったりする間接経験もある。いずれにしてもそれらがさまざまに結合して、その人の行動の仕方やものの考え方を形成していくのである。したがって、経験は直接・間接の両方を取り混ぜて少しでも豊かにした方がよいとされる。青少年の奉仕活動やさまざまな体験活動は、まだ直接経験の乏しい段階にある人間に対し、直接経験を豊かにしてくれるという大きな意味をもっている。

もう1つ、その意義として強調されているのは、小・中・高校生がさまざまな奉仕活動を通じて、社会の一員であることを実感し、思いやりの心や規範意識を育むことができる、という点である。また、広く物事への関心を高め、問題を発見したり、困難に挑戦し解決したり、人との信頼関係を築いて共に物事を進めていく能力を育むとともに、学ぶ意欲や

思考力、判断力などを総合的に高め、生きて働く学力を向上させることができる、ということも強調される。

③ 18歳以降の社会奉仕活動

9月入学で登場してきた18歳以降の学生の社会奉仕活動については、

- ① 直接体験によって現実の社会の課題に触れ、視野を広げ、何を目指して学ぶかが明確になって学ぶ意欲が高まる
- ② 知識や技術を習得し、就職を含め将来の人生設計に役立てることができる

ということがいわれる。中教審生涯学習分科会では、例えば、大学等を休学して長期間の奉仕活動等に取り組んだり、職業経験を積んで再度大学等に入り直したりするなど、いわば「寄り道」を通じて、自分の生き方を切り開く力を身につけることができるようにすべき、との意見も出された。

これからは、団塊の世代が定年退職で地域に帰ってくる。その人たちの奉仕活動は、蓄積された知識や経験を生かしてさまざまな活動を行うことにより、自己の存在意義を確認し、生きがいを生み出すことにつながる。さらに、個人が活力を得るだけでなく、地域社会の活性化にも寄与できるということがある。将来的には、社会人の社会奉仕活動が、従来は考えられなかった新たな活動を創り出すと予想され、それが新たな職業を生み出すことにつながるともいわれる。これからの奉仕活動を考える場合には、そのようなことも見通しておかなければならないであろう。

